学 会 名	第31回日本慢性期医療学会 （2023年10月19日～20日）
研究テーマ	脳梗塞の重度障害が残存し、自宅退院できた一症例 ～家族の希望と不安に寄り添うことの重要性～
病 院 名	医療法人喬成会 花川病院
演　　者	○寺田 美香（看護師） 原口 亜珠（看護師）

概　　要

【はじめに】
当院は、回復期リハビリテーション病棟で入院時から本人・家族の意思決定を尊重した退院支援を行っている。
今回、脳梗塞による重度の麻痺や高次機能障害によって意思疎通困難である患者家族に対しペプロウの看護理論を用いて対人関係を構築することで、家族の自信に繋がり在宅生活を継続する事が出来た事例を紹介する。
【事例紹介】
患者：A氏　86歳、女性
病名：右心原性脳梗塞
入院期間：令和4年6月～令和4年12月
背景：次女と二人暮らし。3年前にレビー小体型認知症の診断を受け、被害妄想や徘徊などのBPSD症状などがあったがデイサービスを利用し生活。同年５月、脳梗塞発症し、急性期病院にて血栓回収術施行、発症から2週間で当院へ転院される。
次女はこれまで母に対して優しく出来なかった事、発症にすぐ気が付いてあげられなかった事など自責の念があり一度は自宅で見てあげたいという言葉が聞かれていた。
【経過】
意識障害や嚥下障害により経鼻経管栄養、左上下肢の完全麻痺によりADL全介助であった。
早期から自宅退院を視野に情報収集などを開始するも、次女以外の支援者がおらず介護負担や精神的負担が予測された。次女は不安神経症がありパニックになりやすい性格であり、患者の状態を電話や動画を用いて共有し、受け止めを確認しつつ信頼関係が構築出来るよう関わった。次第に次女からは不安が聞かれるようになったが常に支持的な関わりを続け、繰り返し介護指導を実践した。リハビリ期間を経て、経口摂取は可能となるがADL全介助（要介護5）で自宅退院された。退院5か月後に自宅訪問を行うとサービスを活用しながら在宅生活を続けられており、「自信がついた」との言葉も聞かれた.
【結果】
次女の精神的特性や家族背景を踏まえた上で、ペプロウ対人関係理論に基づいた家族看護を実践する事で信頼関係が構築され、問題解決能力を高める事ができ、在宅生活を継続することができたと思われる。
【考察】
鈴木らは「家族を何とか変化させようと意気込むのではなくその現状をあるがままに認め家族の気持ちの流れに寄り添っていく姿勢こそが大切であろう」と述べている。入院当初から次女の気持ちに寄り添い、不安を共有し
自宅退院に対して揺れ動く心境に共感する事が有効であったと考える。
ペプロウの対人関係理論では、患者と看護師の関係を治療的な人間関係と捉え、「人と人が互いに尊重し、お互いに成長していく」と
述べられている。
各段階毎のニーズに合わせて支援した結果、関係構築ができスムーズに退院支援を行うことができたと考える。

【引用参考文献】
(1)藤原佳代子（2023）：家族システムに着目した家族看護に関する文献検討、秀明大学看護学部紀要
(2)長嶋祐子（2017）：回復期リハビリテーション病棟の看護実践、昭和学士会誌
(3)鈴木和子、渡部裕子（1999）：家族看護学理論と実践　第2版、日本看護協会出版社
(4)稲田八重子訳（1996）：ペプロウ人間関係の看護論、医学書院